

高天原に神留坐ます 皇親神漏岐 神漏美の命以て 八百萬神等を神集へに
集へ賜ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫の命は 豊葦原の水穗國を 安國
と平けし 知 食せと 事依さし奉りき 此依さし奉りし國中に 荒振る神等
をば 神問けしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて 語問ひし磐根 樹根立ち
草の片葉をも 語止めて 天の磐座放ち 天の 雲を 伊頭の別きに千別き
て 天降し衣さし奉りき 此依さし奉りし 四方の國中と お倭國を見國を
安國と云ふ奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き 高天原に千別き 皇
御孫命の命の御殿仕へ奉りて 天の御蔭 日 今 安國と平け
く知るしむむ國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は
天つ罪 許許太久の罪出でむ 此出でば 天つ宮事以ちて 天つ金木を
本打ち 末打ち断ちて 千座の置座に置き足らはして 天つ菅麻を本刈
り断ち 末刈り切りて 八針に取り辟きて 天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

文藝茶店喫

二千二十一年

十月号



題別きに千別き
お倭國を見國を
高天原に千別き
皇

今 安國と平け

神

喫茶店文芸 2021年10月号——目次

福原大輝

青いマントのヒーロー 1

天野満

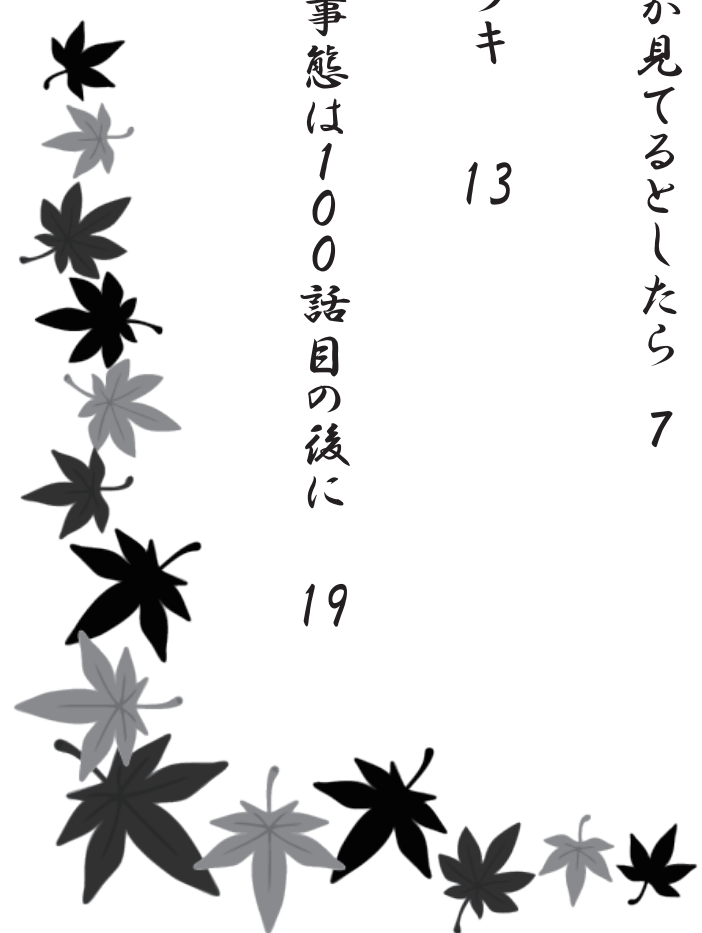
神様が見てるとしたら 7

マサユキ・マサオ

キツツキ 13

氷川省吾

緊急事態は100話目の後に 19



福原大輝

青いマントのヒーロー

——世界が生まれた日の話を、お前さん、知りたいか？

……。

老人は返事も待たずに話し始める。

——あの日、マンントの少年がここに舞い降りてのう……。

——青いマンント……。そう、まるで空のような青い青いマンントじゃった。

老人が見上げる夜空には、暗い中に薄く星が光っていた。その光景はとても青には見えなかったが、老人にはそう見えているかのように、夜空をじっと見つめている。

荒野は見渡す限り続いている、夜空を遮るものは何もない。

——彼と見た夕日が今でも鮮明に思い出せるわい。

老人は記憶をたどり、その一つ一つを懐かしみながら話しているようだった。

そこは無だった。何の音もないし光もない。だが暗いということも、そのときの私は認識していなかった。私はただ、ぼうっとそこにいた。

そのとき、青い光がこちらに向かってくるのを見た。その光の進む方向を見て私は天を理解した。

私の目の前で光は減速を始めて、その光の中に人の顔が見え、さらにその周りをはためく布のようなものが見えた。

天から舞い降りたのは幼い少年だった。

彼は着地するやいなや、その体にまとう光の一部を地に向かって放り投げた。

その瞬間、私を包むこの空間は光で満ち溢れた。それは、少年

が身にまとっていた青い光だった。

私は何かに起こされ、目を覚ました。地面は暖かくこれまでに感じたことのない感触がした。天は真っ青に染まっており、暖かい光が私を照らしていた。

体を起こすと、目の前にはマンントの少年がいた。その肩から垂れ下がっているマンントの色は、まさに天と同じ青だった。あの光の色はマンントの色だったのだろうか。

「はじめまして」

少年は手を差し出す。その手につかまって立ち上がると、私は自分自身も少年とそれほど歳の違わない、幼い子どもだと気づいた。

周囲は草原に満ち、木々の生えわたる森の中に私と少年はいた。鳥の鳴き声が遠くで聞こえた。動物の鳴き声がそこかしこの茂みの中から聞こえ、生命の香りがした。

私が経験した「無」は何だったのだろうか。今の状況が信じられなくて、私は少年にこう訊いた。

「この森は君が作ったのかい？」

私は彼の傷一つない端正な顔を見ていたが、彼はやがてその首を横に振った。

「僕にそんなことできないよ」

彼は子どもらしくはにかみ、恥ずかしそうに体を揺すった。マンントもそれに合わせて揺れた。

「僕はずつとここで暮らしてて、それは動物も木も花もみんな一緒だよ。だからここは、みんなで作った森なんだよ」

彼の答えに私は、頭の中に引つ掛かるものを感じた。私がこうして目覚める前のことは夢だったのだろうか。私が記憶の隅を探っていると、彼が私の手を引いた。

「さあ、遊ぼうよ」

私は彼に手を引かれるままに森の中を歩いた。森を抜けると川が見えた。そこでは、動物たちが水浴びをしていた。サイ、カモシカ、キリンにゾウ……。他にも様々な動物たちが一緒になつてのんびりしていた。

彼がその集まりにおもむろに近づいていくと、動物たちは彼を迎え入れるように顔を折り寄せてくる。

しかし、やがて私の存在に気づくと、動物たちはじつとこちらをにらみつけ、警戒の色を示した。

「大丈夫、僕の友達だから」

彼がそう言ったとたん、動物たちは私に近づいてきて、私の体のおいをかいた。

彼はその中のサイの鼻を撫で、その場にしゃがみこんだ。

「お願い。森の中を案内して」

サイはうなずくように短く鳴き声を発し、私をじつと見つめて、その後背中をこちらに向けた。少年が目で促すので、私は注意深くサイの背中にまたがった。少年も別のサイにまたがった。すると、サイはその巨体にもかかわらず、とてつもないスピードで森の中を走り始めた。

二頭のサイは風を切り、森の木々の隙間を旋回しながら走り抜けた。周りにいた動物たちもその後から、私と少年を取り囲むようについてきていた。私たちは木になっている果実を食べ、途中

で見つけた湖で水遊びをした。そうして森を一周し終わったあと、山を登った。

山頂にたどり着いたときには、もう日が暮れかけていた。

動物たちは遊び疲れたのか、そばで眠り始めている。夕日が私たちを照らして、その顔や体を橙に染める。

マントの彼の澄んだ瞳には夕焼けがくつきりと映っている。その瞳に見とれていると、彼は私に言った。

「この夕焼けを表現できるのなら、僕はもう何もいらない」

「表現？」

その言い方に私は疑問を抱く。

「君と一緒にこの景色を見たのなら、もう充分、これ以上のことはないということだよ」

再び彼ははにかんだ。

「この日の君とのことを記憶に残しておけば、僕たちはどこでも生きていけるよ」

「どこでも？」

私は彼の言っていることが分からずにいたが、彼はそれ以上夕焼けについて何も言わなかった。サイの鼻を撫でてやると、疲れ果てたのかおとなしくそれに任せている。

「約束しよう」

彼は唐突に言った。

「僕たちは神さまになろう」

「神さまって？」

私は夢かと思っていた「無」の光景を再び思い出そうとした。だがその思考を遮るように彼は口を開いた。

「神さまになって、みんなと仲良く過ごすんだ」

そういいながら、彼はまだ元気に飛び回っていた鳥や、山に住んでいるサルたちとそこら中を走り回った。その姿に私は思わず笑った。

わざわざ神さまにならなくても、彼は動物たちをひきつけ、また動物たちも彼を頼りにしていた。

息を切らしながら、彼は私のそばに戻ってきた。

「約束だよ」

「うん」

私たちは堅い握手をした。

私たちはいつまでもここで暮らすんだ。それが当然のことのようだった。

また明日もその次の日も、森を駆け動物や植物と戯れ、私たちはこの森の生き物たちとともに仲良く過ごしていくはずだった。

しかし、終わりは突然に訪れた。

夜、森で眠っていると私は体がゆすられるのを感じた。目を覚ますその前に体が持ちあげられ、その後風と振動を感じた。

ようやく起き上がると、私はサイの背中に乗せられて、森の中を駆け巡っていることに気づいた。

「どうしたんだ？」

周囲に目を向けると、森の木々が赤い光で包まれているのを見た。

これは火だ。森が燃えているのだ。サイの背中の上で呆然としながら、私は山の上まで連れていかれた。

そこには、同じようにサイの背中に乗せられている彼がいた。

私と彼といくつかの動物たちは、山のてっぺんで火の手から逃れていた。

目下には見渡す限りの炎が森を包み込み、すべての木々が悲鳴を上げているように見えた。そして、まだまだたくさん動物たちが森の中に住んでいるはずだった。

私は涙がこぼれるまま、マントの少年を見た。

彼はいつもと変わらない、子どもらしいあどけない表情で森を見下ろしていた。だが、私のほうをちらりと見た後、唐突に駆け出し、山頂の崖から飛び出した。私が呼吸も忘れるほどの衝撃を受けている間に、彼は炎の森の中へと飛び込んでいった。はためかせた青いマントは炎の中でその青さをなくしている。私は恐怖を覚えた。

私が手を伸ばしたときには、とつくに彼の姿は点になっていた。

しかし、彼が森に飛び込み、その中に溶け込んだその直後であった。青い光が辺りを埋め尽くし、そのまぶしさに私は目を伏せた。

次の瞬間、私が目を凝らした時には、その青は森中を広がっていった。その後から、燃えてなくなってしまったはずの木々がよみがえり始めた。

静謐な森は恐ろしいほどにそのままの変わらない姿に戻って、私は再び夢かと思った。

だが、今度は夢で納得できない。私は彼の姿を探して動物たちと森を駆け回った。どこに行ってもあのマント姿は見つけられなかった。

彼を探しながら、私は息を切らして立ち止まり、あたりを見渡

した。

そのとき突然に、私は自分の体が一気に浮かび上がり、上昇するのを感じた。

サイヤや動物たちは私の体をつかまえて引つ張るがその甲斐なく、私の体は動物たちからどんどん離れていく。

私が手足を動かしてもがいても、そのスピードが緩まることなく、私は天を越え暗闇の世界に入った。森全体そしてその天さえも見下ろす位置まで急速に浮かんでいき、私は上下の感覚をなくした。その後くぼみだらけの白い星に吸い込まれ、私は氣を失った。

目を覚ますと、私は白くて広い部屋にいた。大きな窓ガラスからは暗闇とそこに青い星を見下ろせた。

——何が起きているんだ？

部屋の中を走り回って探しても、何も見つからない。彼も動物たちも。そして当然森の木々も。

私一人だけがこの広い空間にいた。

——一人にしないで。

森の叢とは対照的なこの無機質な床に突っ伏して、私は一人泣いた。

涙も枯れてしまった後、一人で過ごしていると、私のこれまでの記憶が芯のあるものになっていくのを感じた。

やっぱりマントの彼は、あの森を作ったのだと思う。

彼自身の光を削って森に命を与えたのだ。

そして、その森の危機が訪れて、彼は彼自身のすべての光を使

い切って森を守ったのだ。

こうして彼が創造し守り抜いた森が目下にある、あの青い星だ。きつとそうなんだと思うようになった。

やがて私は、彼がもういないことを心の底から受け止める決意をした。私は青く光る星を見下ろしながら、彼は森を守るために犠牲になったということを誇りに思った。

——僕たちは神さまになろう。

彼の言葉と夕焼けが頭の中で繰り返される。

——本当は君こそが神さまになるべきだったのに。

私がこれからできることは、君が守ったあの青い星をこうして見守ることだけだった。

——こうしてこの世界は始まったんじゃ。

老人は長い話を終えるところ訊いた。

——どうじゃ、信じたか？

——わしのいうことを信じたかと、言っておるのだ。

……。

——お前さん、何も話さんな。

そう言った後、老人はいたずらっぽく笑った。

——嘘じゃよ。作り話じゃ。

——世界の始まりなんてそんなもんじゃ。誰にもわからん。

そう言って、夜空を見上げた老人は少しだけさびしそうな顔をした。だがそれも束の間、老人は瞬時に消えていき、星々の一つとなった。

満野天

神様が見てるとしたら

「本倉さん、どうしたんですか、その格好」

駅前の欧風のモダンな作りのカフェの中であって、本倉さんの身なりは相当に不釣り合いだった。

ヨレヨレのドテラに猿股、腹巻き姿で、髪の毛は爆発したように乱れ、線の細い顎や頬から無精髭がびよこびよこ飛び出している。

本倉さんは僕の問いかけに答えることもなく、小指で耳の穴をほじくる。そして、指先についた耳垢を息で吹き飛ばした。

「一体、何があったんですか。明らかに様子が変ですよ」

「別に、何があったってわけでもねえよ」

「本当ですか？」

大学の音楽サークルでに初めて本倉さんにあつたとき、僕は「ロックな人が歩いている」と思った。髪を肩くらいまで伸ばし、いつもイカツイデザインのTシャツに無骨なカーゴパンツ姿で、大学内を闊歩している姿にはある種の威厳があつた。

「ロックンローラーってのは、二十四時間ロックしてねえとダメなんだ。音楽のことだけじゃねえ。服装もいつもバッチリ決めてねえとな」

本倉さんは口癖のようにそんなことを言っていた。本倉さんの格好が世間的にオシャレだったのかどうかはわからないけれども、反抗的なアティテュードと爆発しそうなエネルギーが伝わってくる、その格好を僕は好ましく思っていた。

そんな彼が今や、下町のボロ屋で酒に溺れ人生にくだまくオッサン、その寝起き姿のようになっていた。何かがあつたことは明らかだった。

「もし、悩んでらっしゃるんでしたら、話聞きますよ」

「悩みつつかな、こういうの」

沈み込むようなため息をついてから、本倉さんはポツリポツリと語り始めた。

アツシって親友がいるんだ。地元のツレなんだけど、そいつとは長え付き合いでな。小学校から高校までずっと一緒だったんだ。一緒につるんでバカばかりやってたよ。小学校のときにはピンポンダッシュをどっちが多くできるか対決して、見つかつて怒られまくった。中学のときは好きな女の子がカブって、河原で殴り合いの喧嘩した。結局どっちもフラレちゃったんだけどな。高校のときには二百キロ離れた街まで、自転車で旅しに言ったこともあつたな。金がなかったからよ、宿なんかとってなくて、公園で段ボール敷いて寝てたら警察に見つかって、朝まで逃げ回ってたりもしたっけな。

大学はお互い違う学校だったんだ。それでも住んでる場所は変わらんかったから、頻繁に連絡を取り合って、よく一緒に遊んだり、飲みに行ったりしてた。

で、大学出たあと、俺は地元の小さな工場に、アツシは都会のほうのデカイ商社に就職した。

住む場所も随分離れちゃったうえに、お互い仕事やら何やら忙しくて、連絡の頻度も少なくなってる、気がついたら何年も会ってなかった。

ある日、久しぶりにアツシに連絡をとったんだ。話してるうち

に、こっちに遊び来いよって、アツシが誘ってきたんで、俺は誘いに乗った。いい大人が、都会にいく前日から楽しみでよく眠れなかったんだぜ、笑えるだろ。遠足前夜の子供かつーの。まあ、それはいいとして。

俺は昼過ぎに新幹線に乗って、アツシの住んでる街に行った。着いたときには、もう夕方だった。都心から少し離れた駅で俺はアツシを待つてたら、改札の人混みの中に懐かしい顔が見えた。

遠くに見えるアツシの姿を見て、俺は驚いた。アツシがめちゃくちゃオシャレになってたんだよ。上等そうな黒のテーラードジャケットに、細身のチノパン、ピカピカに磨き上げられた靴。地元でつるんでた頃は、いつもヨレヨレのパーカーにシミの付いたジーンズが一張羅だったんだよ。垢抜けるってこういうことを言うんだな、って俺は思った。

「お前、なんかオシャレになってねえ？」

「ありがとよ。お前は全く変わらねえな」

おうよ、と俺は自分の服に目をやった。ロックバンドのTシャツにカーキのカーゴパンツ。俺のユニフォーム同然の格好だった。立ち話も何だし、どっか居酒屋でも入ろうかって話になった。が、都会の休日ってのは、混み合うもんなのか、なかなか開いてる店が無かった。だから、俺はアツシに提案した。

「空いてる店ねーなら、コンビニで酒買って、路上で飲むってのはどうだ？ 昔、よくやってたけど、久しぶりにどうだ？」

「そんなみつともないマネできるか。もうちょい歩いたら店あるからよ」

俺はてっきりアツシが提案に乗ってくるもんだと思ってた。よ

く考えたら三十前のいい年した野郎どもが、久々に再会して都会の真ん中で路上飲みってのもアレだよな、と俺は思い直して、アツシについていった。

しばらく歩き続けて、そろそろ疲れてきたな、ってところになってやっと空いてそうな店を見つけたんだ。〈飛車角行〉って、名前の店で外見は古いけど、よく掃除されてるのか、清潔感があつて、何よりメニューが安かったんだな。

「ここ、いいんじゃないの？」

「いや、あっちの店にしようぜ」

アツシは別の店を指差してた。〈アンダーネオン〉って名前の店で、外壁がガラス張りになってて、店内が見えるんだが、コンクリート打ちっぱなしの内装で、バーカンにネオンのオブジェが置いてあるような、カウンターにいかにもオシャレで高そうな店だよ。店の看板見てもやっぱり高けーのよ。おまけに人も多そうだった。

俺は渋ったんだが、アツシがどうしても言うし、俺もまあせっかく都会に来たんだから、って思ってた、そのシャレた店に入ってたんだ。昔のアイツなら迷いなく〈飛車角行〉を選んでたと思うんだが。

「最近どうよ？」 乾杯もそこそこに、アツシが俺に尋ねた。

「まあまあ、元気にやってるよ。そういや、最近になって転職したわ。前の仕事は自分に合ってない気がしてよ。まあ、他にも色々事情は合ったんだけど」

「へえ、いいじゃん。実は俺も仕事辞めたんだよな」

「マジか。じゃあ、今は何やってんの？」

「まあ色々とな。『T関連の仕事だったたり、コンサルみてえなこともやってる。自分で稼ぐ力が無いと社会の食い物にされちゃう。商社にいたときに作った人脈を使ってビジネスをやるつもりなんだ。これからの時代、ただ会社員やってるだけじゃ、金稼げねえしな」

「精力的だねえ。あんまり無理すんなよ」

「大丈夫だって。商社時代のことを思えば、今の生活なんて楽勝さ。最近は朝の五時に起きて、筋トレしてんのよ。一日の始まりに運動をすると、体調がいいんだ」

アツシの仕事がとんでもなく激務だって聞いてたから、以前連絡を取り合ったときに聞いていたから、俺は何よりもヤツの体調が気がかりだった。

「筋トレねえ。最近までやってんただけど、百日間やったのを境に休みっぱなしになっちゃってるよ」

「運動はいいぞ、知り合いのデキる社長たちも、やっぱみんなやってるってさ」

へえ、と言いながら俺は運ばれてきたピザを食った。焼きが入りすぎていて、端のほうが焦げて固くなっていた。

「ちょっと、そのピザこっちに貸してくれ」

アツシはピザをテーブルの上でちょこちょこ動かすと、スマホを取り出して、写真を撮った。

「なんで写真なんか撮ってんだ？」

「SNSに載せようと思ってんだ。ここ、話題の店だったから」

「お、なんだ？ SNS映えでも狙ってんのか？」

「SNSマーケティングの一環さ。洒落た店に興味のある層に訴求するための活動っていうか」

「よくわかんねえけど、早く食わねえと冷めちゃうぞ」

昔、アツシと一緒に居た居酒屋で、一切れだけ残った馬刺しを奪い合っていたのをなんとなく思い出した。

「そういえばさ、最近になって、またバンドやり始めたんだよ」

昔一緒にやってたバンドのメンバーと飲みに行ったのがきっかけだった。狂ったように音楽の話をしているうちに、かつての熱が蘇ったんだな。さらにメンバー各人も生活とか仕事が落ち着きはじめていたのが、追い風になった。

「マジかよ。いい感じじゃん。で、どういう戦略立てて活動していくんだ？ 最近はネットでの配信とかもめちゃくちゃ盛り上がってるしな。それとも大規模に集客する作戦でもあるのか？」

「いやいや、音楽だけで食っていくとか、そういうことは考えてねえよ。俺たちはただやりたい音楽を好き放題やろうとしてるだけさ」

「そっかあ、やるんだったらSNSマーケティングとかブランディングとか学んでみるの大事だぜ。最近、急激に人気出てきた『明日に向かって突っ走れズ』ってバンドもマーケティングとかめちゃくちゃ考えてやってるらしいしな」

あー、明日ズ、ねー。あんまりピンとこねえけど。という言葉、俺は薄いウーロンハイとともに飲み込んだ。

〈アンダーネオン〉を出て、二件目の店を探して、俺たちは電車に乗り、さらに都市部のほうに向かった。駅の改札をくぐつ

た途端に現れた人の海に俺は目眩がした。

「初めてきたけど、すっげえ人だな」

「すげえだろ。日本の中で一番の都市ってのはダテじゃねえ」

「オシヤレな服着たやつ多いな。地元とは大違いだ」

「汚え格好してたら、たとえお前でも距離置いて歩くわ」

冗談だよ、とアツシは言った。

が、急に俺は自分の格好、好きなロックバンドのTシャツにカーキのカーゴパンツ姿が、もしかすると、この街にそぐわないのではないかと、と何故か不安になった。

もしかすると、神様に見られているっていうのはこういう気分かもしれないと思った。街にそぐわない格好をしている者には天罰が下る。自分でもバカバカしい発想だと思ったが、この街にはそう思わせるだけの力がある。だから、皆は目をつけられないように身なりを整えているのではないか。そして、アツシもその例にもれなかったのではないか。

「お前はどの街に住まないのか」

「俺はやだね。お前と気軽に会えるのはいいけど、人が多すぎるし、家賃も高すぎる」

「それがな、探せば安い家もあるんだよ」

アツシがスマホで調べた物件情報を俺に見せてきた。

「四畳でキッチン付き、風呂なし、バルコニーなし。駅から三〇分、築六十年の木造で……家賃五万円だあ？ 高すぎんだろうが！」
地元じゃ、五万円出せば鉄筋コンクリートの八畳、風呂トイレ別、バルコニー付き、駅から一〇分、という条件の家に住めるものだから驚いた。

「まあまあ、風呂なんかなくてもどうにかなるって」

「ならねえよ。毎日、キッチンで体洗えってか」

「でもよ、そんだけ不便な家にでも住む価値はあるんだって、この街には。やっぱ仕事探すにしても、人脈作るにしても、地元とはエラい違いだぜ」

「仕事は地元にもあるし、俺はオメーみたいに独立する気もねえのよ」

「独立しようがしまいが、この街に住むのがいいと思うぜ。住んでるだけで物事の視野が広がる」

「視野が広がるってことに異論はねえけど、風呂なしはヤダ」

それから俺たちは、二件目の店を探したが、いい場所が見つからず、仕方なく全国チェーンの安居酒屋に入った。俺は趣味の話や、身の回りで起きたバカっぽい話ばかりをして、アツシはそれらの話題を拾いつつ、ビジネス関連の話に流れを持っていった。

「いきなりスマねえな、また会おうぜ」タクシーの窓から、アツシが拳を突き出してきた

「いいってことよ。お前も元気だな」突き合わせたアツシの拳は、以前より軽く細く感じた。

本当はアツシの家に泊まる予定だった。が、翌日までにやらなくてはいらない仕事が急遽入ってしまったらしい。アツシは泊まって行ってくれてかまわないと言っていたが、俺はそれを断って、宿を探すことにした。

走り出したタクシーが街の灯りの彼方に消えたのを確認してから、俺は漫画喫茶を探して入った。狭いフラットシートのブース

に寝転がって、眠気が来るまで漫画を読み続けた。

都市のこと、神様のこと、変わっちまった親友のこと。そんな
思いが頭の中をグルグル回って、読みたかったはずの漫画の内容
は、これっぽっちも頭に入ってこなかった。

本倉さんは、グラスに入った水を一気に飲み干して言った。

「もしも、神様が自分を見てるとしたら、こういう格好してやり
たくなっただよ。俺なりのロックってやつさ」

自分の服をつまんで自嘲的に笑う本倉さんの眼が、僕には少し
潤んでいるように見えた。(了)

マサユキ
マサオ

キ
ツ
ツ
キ

『うそつききつきつき』

きはつつかない

うそをつきつき

つきつつく』

谷川俊太郎『うそつききつきつき』より

「皆さん、嘘つきはキツツキの始まりです」

セミナーの講師は言った。ホワイトボードにもデカデカと書いた。
た。

嘘つきはキツツキの始まり、と。

あなたも、そのあなたも嘘つきですね。

嘘つきはキツツキになってしまいますよ、こんな風に。

講師は私の口先を指示棒でツンツンと突いてきた。

何故、こんなことになったのか。何故、私の口先はくちばしのように尖っているのか。周囲の就活生も皆一様に口を尖らせ、戸惑った表情を浮かべていた。

嘘つき、と言われてみれば、まあそうなのだろう。

就活は面接官と就活生の騙し合いである。私は大学の先輩からそのように教わった。実際、その先輩はあるはずのない留学経験やリーダーシップを高らかと謳い、一流企業の内定を勝ち取った。

私は就職活動に臨む際、あらかじめ設定を考えておき、ボロが出ないよう注意した。実際、私は既に五つ内定を得ていたし、断りの連絡を入れた際は電話越しに引き留められたりもした。

就活と恋愛は同じ、と以前どこかの会社の人事に言われたことがある。当時は馬鹿げた話だと思ったが、就活を始めてから不思議と女の子にモテるようになった。適度な距離感、安心感、それに適度な嘘は物事を進める為の潤滑剤だった。

就活で最終試験まで残ると大体聞かれる質問がある。我が社の他に幾つ内定を得ているか、第一志望なのかどうか。そんな時、私は嘘と真実を織り交ぜて返答してきた。他に幾つか内定を得ていること、内定を頂ければ是非入社を検討したいこと。正直、自分でもその時はそう思っているし、後から選択肢についてじっくり考えるには必要なことだと思っている。

そもそも、この会社は第一志望どころか、選択の範疇にすら入っていなかった。もう一つ、あと一つ受けてみようかという気まぐれで受けただけのこと。それが、こんな面倒に巻き込まれるなんて。

進路についてほとんど決心しかけていたある日、偶然その求人を見つけた。一目見て怪しげな会社だなと思った。

『人生が変わる、世界が変わる、替えのきかない居場所』

そんな言葉の羅列。しかし、他社の求人と少し違ったのは、そもそも人材を募集しているわけではないことだった。

『何かを変えたいあなたへ。入社志望の有無問いません。一度足を運んでみて下さい。人生の風景が変わります』

その会社の説明会は、ちょうど大学の空きコマと重なっていた。ほんの好奇心で私は応募することにした。向かってみればごく普通の駅前のビル、よくある会議室だった。説明会と同時に面接の様なものも行った。当たり障りない質問をされ、私はいつも通り

それに答えた。

就活生の数は大体二十人程だった。私以外の就活生も、どこか面接慣れした人が多かった。きつと、内定を既にいくつか得ているに違いない。十社以上会社の面接を受けていると大体雰囲気に分かってくるのだ。

私たちは、会社のPR動画を見せられる為に、部屋を移動することになった。私は肩透かしを食らったようで集中力が切れはじめていた。こんなありきたりな、何の魅力も無い説明会に何故来てしまったのだろう。せめて何か得るものはないか、と右前に座った女の子の首筋を見つめた。白くて綺麗なうなじを見て口元が緩んだ。帰りに声をかけて、お茶にでも誘ってみようか。

そんな弛緩した気持ちで席に着く。一体何を見せられるのだろう。部屋が暗くなる。数秒の間があり、スクリーンに映し出されたのは奇妙な光景だった。それは、無数の鳥だった。具体的に言うときツツキが樹を突いている映像だった。トントントン、トカトカトントン、トントントン、と会議室に樹を突く音が響いた。その音が次第次第に大きくなり怒号の様に響き渡った。

次の瞬間、私たちは見上げる程高い木々に囲まれていた。幻想なのか現実なのか。頭上をバサバサと鳥の群れが飛び立った。黒い影が樹木の間を枯葉の様に舞った。その中で一羽だけこちらを向いて喋りかけてきた。

「キツツキは一秒間に二十回木を突きます」

「木の中の昆虫を取り出したり、巣作りをする為に木を突きます」

その声は脳内に直接送り込まれてくる様だった。

スピーカーで増幅されたような機械的な声だった。まるで立て

こもり犯に呼び掛ける刑事の様に、棒読みで高圧的に響いた。

「皆さんは、今日一日で二十回以上嘘をつきました」

「皆さんは会社の内定を得たり、異性と仲良くなる為に嘘をついてきたことでしょう」

「皆さんはキツツキと同じなのです」

「キツツキと同じ皆さんは、今日からキツツキとして生きてゆくことになります」

鳥は、ゲエゲエと気味の悪い声を発して飛び立った。私は鳥の行方を目で追おうとした。しかしその次の瞬間、眩暈と共に膝から崩れ落ち意識を失った。

目が覚めると、私は元の通り会議室の椅子に座っていた。腕時計を見ると、ほんの数分しか経っていないことが分かった。おもむろに手元から視線をあげて、私は思わずぎょっとした。

両隣の就活生も、右前の女の子も、皆一様にくちばしが付いていたのだ。思わず自分の口元に手をやると、触り慣れない硬い物が付いていた。

セミナー講師だけが人間の顔をしていた。スクリーン前の壇上に立ち、彼は私たちを見下ろした。

「はい、今日から皆さんは立派なキツツキですね」

講師は汗をぬぐいながら眼鏡をクイッとあげた。私たちが全員キツツキになって満足なのか、口角が上がるのをごまかす様に唇をペロリと舐めた。

私は講師の様子を見ていたら、段々と腹が立ってきた。確かに私は面接で多少嘘を織り交ぜたかもしれない。しかし、こんな仕打ちを受ける覚えはなかった。私がくちばしを開けて文句を言おう

うかと思った時、先に別の男子学生が声をあげた。

「こんなのあんまりですよ！人権侵害で訴えます」

講師は彼をせせら笑うように言った。

「鏡を見てみなさい。君が普通の人間だなんて、誰が信じるだろうね」

男子学生は、くちばしをギリギリとこすり合わせて悔しそうに涙を浮かべた。彼は私なんかより数倍は屈強な身体をしていた。きっと大学では爽やかなスポーツマンだったのだろう。それが今や、くちばしを付けた得体の知れないキツツキだった

「君達はキツツキなのだ。嘘でも樹木でも好きな様に突いて生きていきなさい」

講師は、会場全体を見渡すように言った。

先程声を上げた男子学生がぶるぶると肩を震わせていた。次の瞬間、彼は講師に向かって襲いかかった。

男子学生は講師の襟首を両手で締め上げ、講師の頭をくちばしで突きだした。コンコンコンコンツと、まるで電動工具の様な勢いで講師の頭にくちばしを打ち付けた。ギャアアツと断末魔の悲鳴が教室に響き渡った。男子学生はそれでも突くのを止めない。キツツキは一秒間に二十回木を突きます。先程の映像で言っていた通りだった。

「内定あげるからっ、助けてくれえ。内定っ、君はっ、弊社の面接に合格しましたあ！」

そんなことより私達を元の姿に戻さないよ、と教室のかしこから罵声が投げかけられた。しかし既に発狂寸前の講師に、その声は届かない。

次第、誰からともなく、一人もう一人と講師の周りに就活生が群がり始めた。デートに誘おうと思っていた女の子も衝動に駆られた様に講師に駆け寄っていき、講師の脳みそをすすった。

真っ白だった壇上のスクリーンは血飛沫を浴びて真っ赤に染まっていた。講師は既に頭の半分以上を失っていたが、口元だけが名残惜しそうにパクパクと動いていた。私は恐ろしくなつて、会議室を飛び出した。

雑居ビルを飛び出すと、そこは来た時と同じ駅前だった。しかし私の知る駅前ではない様子だった。

遙か頭上、ビルの六階の窓が破裂音と共に割れた。私がセミナーを受けていた部屋だった。その窓から、見知らぬ黒い鳥が数十羽、ゲエゲエと鳴き声をあげて飛び立った。私は鳥の行方を目で追った。彼らは一目散に、南へ向かって飛んでいった。見慣れた駅のホームの向こうに、巨大な塔が建っていた。

気付くと、空一面を鳥が覆いつくしていた。鳥たちはすべて、塔に向かって飛んでいる様子だった。鳥を眺めているうち、私はいても立つてもいられなくなつて、彼らの飛ぶ方角に駆け出していた。私も早く、あの塔に行かねばならない。理由は分からないが、とにかくそれが私の使命なのだ。

高ぶつた気持ちを抑えようと深呼吸した途端、私の口からゲエゲエと奇声が発せられた。あの鳥たちと同じ鳴き声だった。背中から翼が生えてくるのを感じた。そうして、今にも羽ばたこうかという時、突然路地からとび出してきた女に腕を掴まれた。

私は彼女に見覚えがあった。それは元恋人だった。五歳年上で、一年程前に三ヶ月だけ付き合ってから別れたはずだ。

「そっちに行っちゃ駄目よ」

女は私の腕を引っ張りながら走った。足がもつれ、よろける。彼女のことは勿論分かるのだが、名前が思い出せない。彼女とは街コンで知り合った。都合の良さそうな女という印象で付き合いだしたのだが、とにかく面倒な女だった。スマホの中身を執拗にチェックしてくるし、デートに遅刻すると一日中機嫌が悪かった。確か、一度身体の関係を持ったら途端に冷めてしまったのだ。

走っている最中、こっそりラインのフレンドリストを確認した。三度見返しても、彼女らしき名前は無かった。もしかして、と思いブロックリストの方をチェックすると「さゆり」という名前を思い出した。私にとって、さゆりとはその程度の関係だった。それでも、この理解不能な状況では彼女にすぎるしかなかった。

気付くと、私たちはさゆりの暮らすアパートの前に立っていた。「早く、私の部屋に来て」

次から次へと出来事が進んでゆく。私の意志とは無関係に、世界が少しずつおかしいな方向に変化している。

「ちょっと待ってよ」

私はさゆりの手を振り解いた。一度深呼吸がしなかった。

なによ、と不貞腐れた顔でさゆりは私をにらんだ。

「あのね、キツツキになってしまったあなたをかくまってくれる人間なんて私の他に居ないのよ。分かるかしら？」

確かに私はキツツキになってしまった。それは絶望的な状況であり、さゆりに身を任せる他無いのかもしれない。それでも、何かがおかしい。世界の秩序や法則とかそんな大それたものではなく、もっと根本的に。何故あの路地で私を待ち構えていたのか。

すべては仕組まれたものではないのか。

「あれを見て」

さゆりが塔の方向を指さした。ゴォゴォと地響きがした。塔の根元からモクモクと煙があがっていた。塔の窓の一つ一つがネオンのように点滅している。私はそれと似た様子をニュースで見たことがあった。サイズは違うが、ロケットの打ち上げ前の様子だ。夕闇に佇むその巨大な建造物は塔ではなかったのだ。

「就活ばかりしてるくせにニュース見てないの？嘘つきはキツツキにされて、月に送られることになったのよ」

巨大なロケット。宇宙船と言った方が良さそうか。見つめていると、私は今にも駆け出しそうな衝動に駆られる。改めてさゆりの手が私の腕をがっちり掴んできた。そうだ、さゆりは付き合っていた頃も妙に押しが強かったのだ。私は抵抗する気も失くし、さゆりのアパートに引きずり込まれた。

ちょっと待っていなさい、と言いきゆりは台所からアルミホイールを持ってきた。私は椅子に座らされて、頭にアルミホイールをぐるぐる巻きにされた。あの宇宙船から飛んでくる電波がキツツキ化を促進して、引き寄せる効果もあるらしい。

これでしばらくは大丈夫ね、とさゆりは言った。私は次第に、さゆりの存在が頼もしく思えてきた。

「月に連行されたキツツキは一体どうなるんだい？」

「レアメタルの採掘をさせられるのよ」

「どうやって？」

「くちばしで突くに決まってるじゃない」

不意に地響きの波長が変わった。

「あなたほら、そろそろ打ち上げよ」

地平線上の夕陽が深い紅から紺色に変化しつつあった。鳥たちはもう居ない。摩天楼の様なその巨大ロケットが、街を揺らし大気を揺らし、離陸しようとしている。

「これは始まりに過ぎないわ。あなたもいつか、月に送られるのかしらね」

でもね、大変なの。放射線を日夜浴びて癌になるかもしれない。あなたが大好きなお寿司や焼肉も一生たべられない。あなたがいくら嘘つきだからって、月に送られたくなんかないでしょ？

キツツキになってしまった嘘つきが月に送られないようにする方法を一つだけあなたに教えてあげる」

さゆりが私の指に自分の指を絡ませてきた。

「正直者と結婚することよ」

『人生が変わる、世界が変わる、替えのきかない居場所』

不意に、あの怪しい求人の謳い文句が頭の中を過った。そうか、これがそうゆうことか。私は曖昧に浮かせていたその指を、数秒かけてゆっくりと握り返した。

氷川省 吾

緊急事態は
100話後に

人類が火星に降り立ってからすでに40年以上が過ぎた。企業が資源を採掘するための足場を築き、従業員がそれぞれの仕事を行ってレアメタルや希少土類、燃料の原料を見つけている。

火星の資源採掘を行う企業の一つ、NUT社で働く長池誠は、メタン採掘施設建設基地においてモニターをながめ続けていた。画面には、砂嵐の中を行くボットのカメラが捉えた映像が表示されている。

モニター越しに見る景色は極めて視界が悪い。非常に細かいダストが舞い上がり、太陽光パネルの上に積もって発電効率を下げ、フィルターの目を詰まらせ、機械の隙間に入って作動不良やショートを引き起こす。

火星の野外で使われる機械には入念な防塵対策が施されていないものの、少しでもすき間があればすぐに故障する。そのたび、人間が屋内に引っ張り込んで修理してやらなくてはいけなくなる。

誠たちがやっているのは、採掘予定地に施設を建設するロボットの監督する業務だ。本部から送られるユニット化された資材などを、事前に送られている機械がプログラムに従って組み上げる。人間は機械が正しい場所に物を置き始めるかどうか、おかしい方向に進まないかどうかをチェックしつつ、不具合があった時はそれを修正する。

この日もそんな「不具合」が起こった。砂嵐の予報があったのでロボットを格納エリアに戻そうとしたが、その前に砂嵐に見舞われた。大半は自力で所定の場所に帰還したが、4足歩行型の軽作業モデルが道に迷って異常発生シグナルを送ってきた。イヌ

ほどの大きさで、背中にマニピュレーターを付けたモデルだ。小回りが利くが軽いので、下手をすれば飛ばされてしまう。

単独では帰れそうにないので、他のボットで回収することになった。なるべくパワーのある履帯駆動の中型モデルを、半自動モードで信号の発信位置に送り込む。二重遭難を避けるため、送り込むのは1体だけだ。回収役のボットに異常が生じれば、即座に引き返させるつもりでいる。誠のやることは、ボットの地形レーダーと赤外線カメラ、機体の情報を監視し、ボットがどう進むべきか、引くべきか進むべきかを決定することだ。

画面の中の砂嵐はますますひどくなっている。火星ではしょっちゅう砂嵐が起こる。特に夏になると大気が暖まるので、今日の様な激しい砂嵐が発生しやすくなる。

火星には夏があれば冬もある。火星の地軸は地球と同じように傾いているので、時期によって太陽までの距離が変化する。つまり、一年の内で寒い時期と熱い時期、そしてその間という「四季」が生じる。

だからと言って、火星に住んでいる人間が「季節感」を得ることはない。生活するのは有害な宇宙線を避けるための半地下住居の中。もちろん温度は常に一定に保たれている。真冬になろうが真夏になろうが、暑いのも寒いのも無縁の世界だ。

赤茶けた大地には、新芽や花をのぞかせる草木もなければ、虫も鳥もない。季節の変化を示すのは、冬の極地方に降るドライアイスの雪か、誠がモニター越しに眺めているような砂嵐だけだ。無味乾燥すぎるせいで火星の労働者の間でうつ病の発症が問題になっており、企業はその対応に苦慮している。

そうした環境で、日常とは少し違うイベントの発生はありがたい刺激になる。たとえそれがトラブルであっても、命に関係するような内容でなければレクリエーションに成りえる。

誠はゲームのハードモードをプレイするときの様に画面を真剣に凝視し、ボットを信号の地点に近づけていく。(残念なことに)何事もなく、横転したまま半ば砂に埋まりかけている四足歩行型を発見した。ボットのアームで引っ張り出して荷台に乗せ、同じルートを辿って帰ってくるように命令する。行きに問題が無ければ、帰りは放っておいても大丈夫だろう。

本当に何でもなかった。正直言ってしまうと感じて画面を見つめていると、砂嵐の中に妙なものが見えた。10m程度先に、細長い物が5つほど立っている。高さが1.5〜2mぐらいだろうか。

行きにはそんなものはなかった。見落としたはずもない。ならば帰りのルートを違えたか。遭難したボットを助けに行って、帰りに道に迷わせるのは間抜け極まりない。

だが、移動ログと地形リーダーを見比べてみても、ボットは正しいルートを取っていることを示している。

奇妙なことに、赤外線カメラの画像では物体の影がぼんやりと見えているが、それ以上に探知距離に優れたリーダーには反応がない。誠はボットの移動速度を少し落とし、細長い物にカメラをズームした。

心なしか、人間の姿に見える。大きさと言い、ぼんやりとだが判別できるシルエットと言い、やはり人間そっくりだ。だが周囲100km以内にいた人間は、誠に建設基地の職員6人だけだ。

こんな日に外に出るようなバカは誰もいない。

ボット側のノイズかと思った時、画面の中で影が動いた。足を動かして。画面内を右から左へと。

誠はぎょっとしてボットを停止させた。カメラ側の動きが止まったにもかかわらず、画面に映る影は動いている。

機械の不調か、それともだれか本当に居るのか。たしかめるためにボットを近づかせようとしたとき、急にカメラが真っ暗になった。ブラックアウトかと思ったが、ボットのすぐ前を何かが無切っているのだと分かった。

再び視界が戻った時――目の前を何かが通り過ぎた後――歩く影は全て消えていた。カメラとリーダーで周囲を探したが、先ほど見た物は影も形もない。ボットの周囲では、いつものように何もない世界で砂嵐が吹き荒れるだけだった。

「で、幽霊を見たか」

全員が集まる夕食の席で、同僚のアレックス・ボーンは誠の話聞くなりそういった。今日のメインディッシュはナスのミートソースパスタ。調理と医療を担当するアントニオ・コンテの得意料理だった。肉はフリーズドライされた合成たんばく質だが、トマトとナスは温室で水耕栽培されている。

「いや、別に幽霊だと思っているとかそういうわけじゃ……」

誠としては、モニター越しに人影のような物を見たと言ええることはないが、手っ取り早く言うなら幽霊なのかもしれない。

「録画はどうだ？」

この現場をまとめる班長のジャック・アンドレが聞いてきた。

幽霊かどうかというより、異常がある場合は現場責任者として把握しておかなくてはならないと考えてのことらしい。

「ないです。三角測量の位置データしかログを取ってなかったの。砂嵐を録画しても意味ないですから……」

「つまんないのー」

鉱物採掘の専門家であるシアン・メイがヤジを飛ばした。誠としても録画しておけばよかったと思ったが、いまさら言ってもどうにもならない。

「火星で幽霊話しても実感が全然ないな」

アレックスは誠の話を幽霊話ということにしたらしい。

「亡くなった人なんて50人未満だしね」

メイが後を続けた。現時点で火星にいる人間の数は2千人弱。訪れた人間の総計は7千人にも満たない。障害や基礎疾患もない健康な人間だけが勤務でき、危険な建築作業は全部ロボットにやらせているとなると、人が死ぬことはあまりない。悲惨な事故が起こったこともあるが、幽霊話は生じていない。

「この場所で死んだ人もいないしー」

「ここで仕事した前の2班は、みんな生きてるからな」

火星に人類が降り立って以来、誠たちがいるこの基地に足を踏み入れたのは、最初に現地調査に来たチームと、設備が設置されて先に仕事をした2班だけだ。事故も何もなかったし、全員生きて火星や地球で仕事を続けている。

「ただ、上空でなら人が亡くなっていますね」

アントニオが上を指さし、ジャックが頷いた。

「20年ぐらい前だったかな。ライアン・コーボレーシヨンの低

軌道シャトルの実験で6人が死んだ。空中分解したらしい」

「有名な話ですね」

火星との往復に使われている比推力可変型プラズマ推進機を、通常の輸送サービス用航空機に使えるようにするための実験だった。だが飛行中にボルト一本折れて内部の空気が急激に放出され、機体が耐えられずに破壊された。中に人を乗せる飛行機であるが故の事故だった。

「分解したのは、この真上に近い場所だったらしいが……」

「飛行機が壊れたのが真上なら、遺体とか機体の破片は全然違うところに落ちるけど」

上空から投げ出され、慣性で前方に飛ばされながら落ちていくの様子を手で再現しながら、アレックスが言った。

「つーことは、誠が幽霊を見たって言っても、ホラー話としちゃ全然だめってわけだ」

「別に怖がってほしかったとか、そんなわけじゃないんだけど……」

誠にしてみれば、何かけなされたような気分になった。

「真下を掘ったら謎の宇宙飛行士の死体が見つかるかもね」

メイが下を指して言った。その話で、誠は有名なSFのストーリーを思い出した。

「身元不明で、死亡したのは5万年前ですかね」

「宇宙服は真っ赤で。場所が月じゃないけど」

「何の話なんだよ？」

メイと誠の言っていることが理解できないアレックスが聞いてきた。

「ジェイムズ・ホーガンの『星を継ぐもの』。超有名SF文学。知らない？」

「俺は映画派だ」

地球とのネットがつながりにくい上に基地も狭い火星では、データサーバーに収められた大量の書籍や映像が娯楽として活躍している。アレックスはあまり本を読まないタイプということになる。

「まあ、こんな狭い場所でもちまちま仕事してたら、面白い話の一つでも欲しくなるわな」

アレックスが背もたれに背中を預け、ふんぞり返って天井を仰いだ。

採掘基地——というより火星での生活は地球に比べると退屈だ。変化のない人工的な環境でしか生きられない以上、当然ながら面白いことも少なくなる。トラブルがあっても困るが、あまりに何もないのも辛い。

そんな状況で『面白い話』を作り出せる人間は重宝される。食料の生産研究を行う上級研究員の小川秋子は、そうした（意味不明な）話題を量産する人物だ。二十代の前半で複数の博士号を獲得した才媛だが、その才能を自分の思い付きのために濫用する。

その彼女が、珍しく何も言っていない。いつもならイカレたアイデアを放出するか、誠をおちよくるか、耳に痛い皮肉を誰かにぶっ刺すかのどれかなのだが、今は目を宙に向けて黙っている。

「秋さん、どうしました？」

誠が話しかけると、秋子はくると振り向いた。

「百物語をしよう」

百物語は日本の伝統的な怪談会のスタイル。基本的には夜に何人かで一部屋に集まり、青い紙を貼った行燈を百個用意して行う。参加者は各々が怪談を語り、一話語り終えるごとに行燈を一つ消していく。怪談は恐怖系の話だけでなく、不思議な話や奇妙な話でもいい。

そうして百話目の怪談を語り終えて行燈を消したとき、何か妙なことが起こるといふ。この妙なことが起こるのを防ぐため、九十九話目で止めておいて、そのまま朝が来るまで待つスタイルもある。

灯りは青い行燈の代わりに蠟燭にする、灯りを置く部屋は隣にして、語るごとにそちらに消しに行く、鏡を用意して蠟燭を消すたびにそこに自分の顔を映してみるなど、細かい作法のバリエーションがある。ただ、灯りを百個用意して、怪談を語るたびに消していくという部分は共通している。日常とは違う異様さを作り出し、それをどんどん深めていくための演出だ。

日本では怪談は夏の風物詩で、俳句でも幽霊と百物語は夏の季節語になっている。クリスマスやイースターなどと同様に、人間が季節を感じられるイベントの一つである。

「まあ、日本にはそういう遊びというか、風物詩があるってわけ」いつも通り妙な博識ぶりを見せつけた秋子に、ジャックがふんふんと頷いた。

「『デカメロン』とか『カンタベリー物語』の怪談バージョンを一晚でやる感じだな」

「そんなところ。狭い建物の中で季節も考えずに過ごすってのは、やっぱり精神衛生的に良くないと思うのよ。幽霊話もあったんだし、レクリエーションしてみてもいいんじゃない？」

「賛成。面白そうじゃない」

「興味あります」

メイとアントニオがそれぞれ肯定的な反応を返した。

「んなことやって何になるよ」

背もたれにもふんぞり返ったまま言うアレックスに、秋子が出来て来の悪い生徒に向けるような視線を送った。

「そーいうこと言うからあんたはモテないのよ。彼女が出来ても誕生日を忘れて、言われたら面倒臭がつてレストランも予約しようとしなくてフラれる類なんでしょうが」

「なんか無茶苦茶言われてるね」

やたらと具体的だなと思いつながら誠がアレックスの方を見ると、少し表情がこわばっていた。

「なんで心当たりありそうな顔してんのよ」

メイの追撃にアレックスは黙秘を貫いた。何となくいたたまれなくなり、誠はジャックに話を振った。

「班長はどう思います」

「休みの日ならいいんじゃないか？ 何かイベントがあってもいいと思うが」

すかさず秋子が身を乗り出して、ビシッと指さした。

「やっぱ妻帯者は理解してるね。宇宙に長期出張しまくっても、奥さんに逃げられてないだけある」

「……誉め言葉として受け取っておこう」

宇宙飛行士の離婚率は低くない。一度の航海で3か月以上連絡不能になる原子力潜水艦の乗組員の場合、一度の海に出るたびに一組が離婚すると言うが、宇宙飛行士も似たような物だ。地球と火星の距離を隔てながらも、ジャックの夫婦仲は安定しているほうだが、それでもジャックが常に冷や冷やしていることを皆知っている。

「アレックスはジャックを見習って参加決定ね」

秋子が意地悪い顔でアレックスの方を見る。アレックスは無言のまま目をそらした。

「で、いつやる？」

秋子が聞くと、メイが手を上げた。

「今週の週末って、香港だと盂蘭勝会やつてる時期になるよ」

「太陰暦の7月半ば。いいじゃない」

「お盆ですか」

今一つ理解できない欧米出身の3人に、メイが向き直る。

「中国とか香港とか日本とかで、ご先祖様の霊を供養する行事があるのよ。日本だと、祖先の霊が実家に帰ってくるって考えもあるの」

アントニオがなるほどとうなずく。

「すごくぴったりですね」

「それじゃあ、1人で16か17話ぐらい。自分の国の伝説とか童話とか都市伝説とか、地元の言い伝えとか、体験談とか何でもいいわ」

なし崩しの様に開催が決定してしまったが、誠には気になる点があった。一番大事な要素だ。

「青い灯りはどうやって調達するんです？ LEDとか100個もないですよ」

「分かっていと思うが、火気厳禁だぞ」

ジャックが釘を刺した。秋子なら蠟燭ぐらいはいくらでも作れるだろうが、火星では基本的に火は耐火設備が整ったところ以外では使用禁止だ。万が一火事が起これば酸素がなくなり、基地の全員が呼吸不可能なマイナス数十度の世界に放り出されることになる。

「そこは大丈夫。48時間あれば、電源なしで熱もない灯りが用意できる。誠ちゃん。鉄骨固定用のボルトって、透明なブラボルトに入って届けられるでしょ？ いらなくなった奴を100個集めて、私の実験ブースのところに置いておいて」

「……はい……」

誠に拒否権はなかった。断ったら何を「暴露」されるか分かった物ではない。

「それじゃあ、また明日から仕事頑張りますか。ごちそうさま」

そう言って食器を食洗器に入れ、鼻歌と共に自分の城である温室の方に消えていった。その後ろ姿を見ながら、誠は少し気になっていたことをジャックに聞いた。

「ところで、僕の意見とかは求められなかったですね」

「君はあれだ。秋子の舎弟だから」

週末。火星時間で夜8時。夕食の片づけが終わってしばらくしたところで、秋子から会議室に集まるように連絡が入った。

誠が部屋に入ると、秋子がセッティングを終えたところだった。

高さ5cm、直径3cm程度の、透明なプラスチックでできた筒が、机と棚に並べられている。誠が用意したボルト用の入れ物だった。中に数十mlほどの液体が入っており、それ自体が青い光を放っている。

続いて入ってきたジャックが、灯りの一つを手にした。

「これはどうやってるんだ？」

これ？ と秋子が別の物を手に取って軽く振って見せる。不思議な光を放つ液体が中で揺れた。

「ヴァルグリンとルシフェラーゼ。ウミホタルが光る物質。水に溶かしてある」

「そんな物持っていたのか？」

「本部基地なら実験のために飼われてるけどね。さすがに持ってきてない」

「作ったのか？」

「この2つを作るウミホタルの遺伝子データを、本部のサーバーからそれぞれダウンロードしたの。それを合成してから酵母に組み込んで、後は酵母ちゃんが頑張って作りまくってくれたわけ」

「……それは大丈夫なのか？」

「似たようなことは何回もやってるしね。やった場所は隔離しているし、酵母ちゃんも殺菌しちゃったから、問題なし」

ほどなくして、メイとアントニオ、アレックスが到着した。アントニオは食材を入れるコンテナを持ち、メイは魔法瓶を両手に下げている。

アントニオがコンテナを机に置いた。中には軽食が乗った皿が入っている。

「ブルスケッタとキッシュ・ロレーヌ、チーズ、サラミのブリオッシュサンド。お菓子はアーモンドケーキとチャンペローネです」

「めちやくちや気合入っていますね……」

確かに美味そうだが、食材も調理器具も限られている火星の基地には不釣り合いなほど豪華な「軽食」に、誠はあきれるばかりだった。

「こっちはオレンジジュースとコーヒー。アルコールじゃないのが残念だけど」

メイが魔法瓶を机の上に置く。

「私ならジュースでお酒作れたけどね」

「頼むから私の頭痛の種を増やさんでくれ」

小規模基地では基本的にアルコールは禁止で、醸造は本部基地でしか許可されない。秋子なら果物ジュースをフルーツワインにして、パンからビールを作って、デンプンからウオッカでも焼酎でも作れるだろうが、責任者であるジャックの首が危うくなる。

「さすがにあんたの首が飛ぶような真似はしないわよ。じゃあ、皆座って。準備できたら電気消そう」

アントニオが皿とコップを配り、緊急時のために懐中電灯の位置を確認すると、全員が席に着いた。秋子がスポイトを全員に配る。これを光る水に一滴たらしして振ると、酵素が失活して光が消えるらしい。

そして電気が消された。

平凡な会議室が異界に変じた。化学物質が作る熱の無い青い光が、暗闇の中に100個浮かんでいる。人の顔は青く照らされ、さまよう亡霊のようだった。

「これは、なんというか……。ヤバイな」

アレックスがボキャブラリーに乏しい表現をしたが、誠もそれより適切と思われる表現を思いつけなかった。

「じゃあ、始めようか。誰から行く？」

秋子がわくわくした様子で手を打ち鳴らした。

——100話の中で、各職員自身が体験した話——

ジャック・アンドレ

ブリュイ・ダニモ (Pluie d'animaux) という物を聞いたことは？ 直訳すると「動物の雨」という意味だ。英語ではファフロツキーズ (Fafroskies) というらしいな。

本来は降るはずのないようなものが、雨のように空から降ってくる現象を指す。魚のような水産物、カエル、正体不明の肉片などだ。たいていは竜巻などで巻き上げられた物だったり、鳥が吐き出した物だったりする。後は、大量発生した動物が一斉に姿を見せたときに、それが空から降ってきたと錯覚するような場合だな。珍しいが、オカルトな話というわけじゃない。基本的には。実は私も遭遇したことがある。ただ、地上じゃなくて空の上でだ。

空軍にいたころの話だ。それに遭遇したときは輸送機で操縦士をしていて、いつも通り基地から基地に荷物を輸送する任務をしていた。それでドイツとスイスの国境辺りの上空に來た時だった。空はおおよそ晴れていたが、その季節のアルプスには珍しく大き

な積乱雲があった。レーダーで見ると高さは12 kmぐらいだったかな。乗っていた輸送機の実用上昇高度の限度は9 kmで、まっすぐ行くと雲の中に入ってしまうから、迂回することにしたんだ。そうやって左にする形で通り過ぎて、横目で見ながら大きい雲だなと思っていたら、突然コックピットのサイドガラスのあたりで“ベシヤッ”というような音がした。雨粒にしては大きいし、雹にしては水気の多い音だった。

そちらを見てみると、水風船でもぶつけたように、何かの液体がガラス一面にへばりついていてた。何が起こったのか分からなかったが、また音がして水のような物がガラスにぶちまけられた。ただの水ではなかったと思う。粘性があるみたいな感じだったからな。

訳が分からんが、とりあえず左の積乱雲から飛んできたらしい。それが次々ぶつかってくる。灰色の、ガラスよりもすこし大きい鳥か、それぐらいの大きさの魚か。そんな感じの物がいくつも、すごい勢いで飛んでいるように見えた。

ガラスはプレキシガラスだから簡単に割れることはないが、それでも絶対というわけじゃない。ガラスが割れると、機内の気圧が一気に下がって気絶してもおかしくない。エンジンに液体が入ったら壊れるかもしれない。4つあるから全部壊れん限り落ちはしないが、少なくとも愉快な状況じゃない。

何だか知らんがひとまず積乱雲から距離を取ろうということ、副操縦士に連絡を任せて、右に舵を切って遠ざかった。そうやって向きを変える直前に、飛んできた物が私の目の前に張り付いたんだ。

あれはなんというか……、魚のエイによく似ていた。平たくて、形は横に長いひし形で、長い尾がある。ただ、エイではなかったと思う。もっと色が薄く、軟体動物の様だった。それに魚なら血は赤いだろう？ 飛び散った液体は透明だった。

それと、ガラスにへばりついた側。エイなら口のある側だ。ちょうどそれと同じように裂け目があったんだが、なんというか、人の顔にやけにそっくりでな。ただ、目のある位置は縦に割けていた。あれが開いて中に目があったら、私は舵輪を握ったまま卒倒していたかもしれないな。

さすがにぎょつとしたんだが、飛行機を操縦しているときに視界がふさがれるのはシャレにならんから、ワイパーを動かした。すると、それはあっさりはがれてどこかに消えて、液体もきれいにぬぐい取れた。

積乱雲から距離が離れると、ぶつかってくる物もなくなった。あれが何だったのかは分からなかった。飛んできた物をはっきり見たのも私だけだったから。副操縦士は右側が席だし、航空技術官と積荷管理官は外を見ていなかった。

基地に帰って検査してもらおうと思ったが、液体は飛んでいる途中にほとんど消えてしまったらしい。何の証拠もないから、ぶつかってきた物がああいふ気持ちが悪い生き物に見えたのも、私の気のせいかもしれない。アルプス山脈の上を飛んでいるときに、エイみたいな生き物に襲われたとか、頭がおかしいと思われるだろうからな。

アントニオ・コンテ

これは私の叔父が体験したことです。父と叔父はローマに近いところの出身で、独り立ちするまではずっとその地で暮らしていました。

知っての通りローマにはいろいろな遺跡や名所があつて、ちよつと気味悪い物にカタコンベ——地下納骨堂ですね——があります。ローマのカタコンベではサン・セバスティアアーノ・フォーリ・レ・ムーラ教会地下の物が非常に有名ですが、実はローマだけでも40以上あつて、最近になって新しく見つかったものもたくさんあります。

父と叔父の出身の町でも、彼らが小学生ぐらいの時にそれが見つかったらしいです。それほど大きなものじゃなかったようですが、やはり文化遺産としては貴重ですし、観光名所にもできそうなので、すぐに封鎖して調査が来るまで立ち入り禁止の状態にされたそうです。

まあ、そういう物が見つかったらいたずら好きの子供が入つてみようとするのは常なので、そういうのを防ぐ意味もあつたでしょうね。壊されると困るというのものもあるし、危険ですから。

とはいつても、危ないからって遠ざけられると入りたくなるのが人心——特に子供の心ですね。カリギュラ効果っていうんでしょうか。父と叔父も、どうにかしてこっそり入ってやろうとたくらんでいました。

それである晩、うまい具合にスキをついてカタコンベに入りこんだそうです。

カタコンベは通路と奥の納骨室で成り立っていて、通路の左右

の壁にも棚があつてたくさんの遺骨が置かれていたとのことでした。古くてバラバラになつてしまつた物もあれば、まだ修道士の服を着たまゝの物もあつたそうです。

入つたのが夜で、手には懐中電灯一つ。父と叔父は、もう泣きだしそうだったと言っていました。それはそうでしょう。大人の私でも、骸骨だらけの真っ暗な通路にいたら、それだけで心臓マヒを起こしそうです。

父と叔父も入つたことは後悔し続けていたのですが、意地なのか好奇心が勝つたのか、漏らしそうになりながら奥に行きました。通路自体は20m前後で、奥には少し広くなつた部屋があつたそうです。おそらく、一般の人や位の低い修道士の骨は通路の方に置かれて、もつと身分の高い聖職者が奥の部屋に収められたのでしょう。

父と叔父はそこまでたどり着いたのですが、考えていたのとはちよつと違つていたと言っています。通路では遺骨はすべて棚に作られた棚に置かれていたのですが、ここでは床にも骸骨が置かれていたと。壁にはちゃんとくぼみがあつて骨が置かれているし、スペースには余裕があつたのに、床にも骨がいい加減に放り出されていたそうです。しかも、服を着たまゝの物ばかり。

最初はちゃんと骨を納めていたけれど、後で何か余裕がなくなつて遺体を適当に放り込んだのでしょうかね。無鉄砲な子供でも、それ以上は先に進めず、部屋の様子を見るだけ見たら引き返すことにしました。その場ですぐに引き返さなかつた辺り、祖母に聞いた通り、無鉄砲さと好奇心だけは人一倍の子供だったみたいです。

そうやって懐中電灯で見えいくと、床に転がっている骸骨の服がカトリックの物らしくない事に気が付きました。

もっと現代的な、長いズボンと色のついたシャツを着ていた骸骨が多かったと。そのころの父も叔父も、中世で現代のような染色された色鮮やかな服がほとんどないことなど知るわけもなかったのですが、神父様や修道士がそんな恰好をしていないことぐらいは知っていますからね。司祭様や司教様はもう少しきれいな格好をしています。そういう方の遺体が床に放り出されているわけありませんからね。何よりそういう人たちの格好も、基本はローブですし、

さすがにちよつと気になって見ていると、骸骨が着ているその服に見覚えがあることに気づきました。父と叔父が小学生だったころ、あの肺炎のウィルスが世界的に流行していて、カタコンベが見つかったのはそれか収束したころでした。父と叔父の町でも何人が亡くなった人がいて、骸骨の服が亡くなった人たちが良く来ていた物に似ている気がしたそうです。

壁にもたれている骸骨のシャツが仕立屋のじいさんのお気に入りに似ているとか、うつぶせに転がっている骸骨はシャツじゃなくて革ジャンを着ているようだけれど、トラックの運転手のおじさんが自慢していた良い革ジャンっぽいとか。そういう風に考え出すと、転がっている骸骨がみんな自分の知っている人の物じゃないかという風に思えてきて、一気に怖くなって逃げだしたとのことです。

その後は、まあ祖父母にばれてがつつり怒られて、役場の偉い人からもお説教を食らったそうです。

それから調査が入って、いつぐらいの年代の物だとか、誰が埋葬されているかとかのことが分かって、今では観光もできるようになっています。父と叔父はカタコンベが入れるようになってからも近づくず、そのまま独り立ちして違う町に引っ越してしまいました。

ただ、大人になって里帰りした際、カタコンベについて書かれた案内看板を見たそうです。そこには発見当時の写真が載せられていたのですが、床には骸骨は一つもなかったのです。壁のくぼみや棚に収められていた遺体は、すべて中世の聖職者の物ばかりだったと書かれていました。私自身も、その看板を見たことがあります。

父と叔父が見た床の骸骨は、何だったのでしょうかね。

シアン・メイ

私が大学生だったころの話。その時はドイツに留学していて、地中探査の技術について勉強していたの。レーダーで地中を探査する技術。今は仕事で鉱物とか地下の構造とかを探査しているけど、その時は遺跡を探索するのが勉強だったわけ。

何十年も前から遺跡発掘にレーダーを使うのは当たり前で、遺跡を探したり事前に構造を把握しておいて発掘の時に壊してしまわないようにしたり、まあいろいろ便利なのね。ただ、考古学者はレーダーの扱いとかデータの解析とかは専門外だから、私みたいな畑の人間が自分の勉強ついでに使い方をレクチャーするってわけ。

この時は鉄器時代にあった、ラ・テーン文化の遺跡の発掘を手伝っていたわ。丘の上に造った皆みtainな居住地で、オッピドゥムとかいう物だって教えてもらった。戦争があつて負けたみたいで、武器とか人の骨とかがたくさん出てきたな。掘ったのはまだ一部だけで、全体像を把握することが私たちの役割だったの。

その発掘現場に行く前から、考古学者の間にめちゃくちゃいい男がいるって、少し噂になつた。それで実際に見てみると、その通りだったから驚いたわ。身長が190cmぐらいあつて、肩幅も広くてスタイルが良くて。鼻が高い金髪のイケメン。シャワーもない発掘現場なのに、髪もしつかりなでつけて髭もきれいに剃つて。シャツの襟なんかカミソリみたいに切れるんじゃないかってぐらいピシツとしてて。世界のいい男図鑑で、ドイツ代表にしてもいいぐらいだったわね。

その人は助教で、かなり優秀で知られている人だったらしいわ。こっちは考古学の世界は全然わからないんだけど、論文もたくさん出して評価が高かったそうね。

そんなのだからいつでも大人気で、学生もみんな——特に女の子——がいつも引つ付いてそうなもんだけど、それが全然。性格に問題があるのかと思つたけど、話し方も発掘を指揮しているときの態度も、見た目を裏切らないさわやか男だった。

じゃあ何でかつていうと、この人はとんでもないアル中だったの。言動は完璧に普通の人で、むしろそこの素面の男よりもよほどしつかりしていたんだけど、水代わりにアルコールを飲むぐらいの人でね。お茶やコーヒの代わりにストロングエールやシェリー酒を飲んで、食事のたびにウイスキーやらジンの500

ml瓶を空にするような類だったみたい。

私も一回、実際に見たことがあつたわ。コーヒを出されたら、懐からフラस्कを出してシングルぐらいの量のブランデーを注いで飲んだの。実際に目にしちゃったら、もうそいつはヤバイ奴認定よね。そりゃ近づきたくないわ。

どう考えても頭が吹っ飛びそうなもんだけど、そんな様子さえ見せなかった。教授はかなり渋い顔をしていたけれど、少なくとも仕事は完璧以上にこなしていて、部下にしておけば自分の評価も上がるから、やめるようにしつこく言うことはなかったみたい。

考古学の院生さんの話だと、自分をアルコール漬けにし始めたのは3年ぐらい前からだとか言っていたな。その人も詳しくは知らなかったらしいけれど、何かの発掘が終わった後、ちょっと精神的におかしくなつて、それから酒を飲み始めたとか。普通ならここでダメ人間コースなんだけど、逆に前と同じぐらいか、もつときつちりした人になつて現在に至る、だって。心配にはなるけど、うまくいつているから逆に止めるのが難しい状態ってところね。

ただ、その時の発掘作業中について大学の方に知られて問題になっちゃつて、教授にも止めさせるように指示が行つたの。それを聞いて、誰もが「ああ、これは大変だ」って思った。こりゃ、下手をしたら救急車が必要かもねって話も出たわ。

アル中つてヤク中と基本は同じなのよね。止めたらすぐに禁断症状が出て、それを抑えるために続けちゃう、やめられない。イケメンの助教教授もそうなるかと思つたんだけど、はいそうです

かつて感じてあっさり手放したみたい。

それで普通なら、数時間もしたら手が震えたり、自律神経がおかしくなったり、痙攣したり幻覚見たりするんだけど、それもなくて、普通に過ごしていた。

でもやっぱり影響があったのかな。次の日から、ちょっと具合が良くなさそうな雰囲気が出てきた。ぴちっとしていたシャツにしわが寄ったり、髪が乱れていたり、無精ひげが伸びていたり。そういうところが目に付くようになってきていたな。でも、そっちの方が人として普通というか、考えてみればそれまでの方が異常だったからね。作り物めいた完璧さがちよつとずつはがれて行つて、中の人間としての地が出てきたのかも。

仕事に関してはミスなんかは出てなくて、逆に発掘速度がやけに上がっていたみたい。何かに取りつかれたようにって言えばいいのかな。私がリーダーで遺跡の構造を確認したら、5分もたないうちに掘り始めて遺物とか骨とかを見つけているの。

他の作業をしてないときは不眠不休で、とにかく発掘している。かなり異様な様子だったわね。アルコール切れを抑えるために必死になっているのかと思つたけれど、何か違う気がしたの。

酒断ちしてからは1回しか話さなかったけれど、やっぱり何か変だったわね。なんか、遺跡よりも墓とか人の遺体に注目、というか執着していたみたいだったなあ。酒断ちする前にそんなこと言つてたっけ？ て思つたけど。

まあ色々不安要素はあつたけれど、発掘そのものは何とか進めていけてね。ただ、リーダーの出番はもうそろそろ終わりかなつていう時に、あのアル中助教授が事故にあつたの。穴を深く掘り

すぎて、崩れて生き埋めになったんだって。

まあ、あれだけ急いで一人で穴を掘りまくつたら、そうなのもおかしくなかったんだけど。ただ、その時はまんべんなく掘っていたわけじゃなくて、ピンポイントで深く掘っていたみたい。幸い、皆が気づくのが早くてすぐに助けられたから何とかなかったけど、助教授は見つかった時には意識不明だったわ。

掘り出す時には専門分野がどうか言つていられないから、私もバックホウで穴を掘ったんだけど、その時に一緒に骨がたくさん出てきたの。骨っていうか頭蓋骨。髑髏だけがたくさん。

その遺跡が戦争で負けた集落だつて話はしたよね？ 助教授が埋まつたのは、負けた側の人たち——発掘現場の居住地の人たちの首が切られて放り込まれた穴だったらしいわ。

ラ・テーヌの人たちは生首に力があると考えていたつて学生さんが言つてたな。それから、縦穴を掘つて、そこに生贄を捧げる文化もあったとか。助教授は捕虜の始末と生贄の両方に使つた穴を見つけたのね。一緒に見つかった髑髏は、住民達のちゃん切られた頭だったってこと。

結構な発見だったんだけど、少し妙だったのね。だつて助教授掘つてたところは、一回もリーダーで探查してなかったから。推測して当たりをつけたのか、たまたまだったのかは知らないけど。本人は意識不明だし、私が帰るまで話すこともなかったから。

そういうえば、学生さんが変なこと言つてたわね。あの助教がおかしくなつて自分をアルコール漬けにし始めたのも、たくさんの人が死んだり殺されたりした遺跡を発掘した後だったつて。

酒に逃げていたのか、それとも酔っぱらつていた方がまだ正気

を保てるようなことだったのか、どっちだったのかしら？

長池誠

日本の学校、特に小学校では「七不思議」という物があります。いわゆる学校の怪談で、学校ごとにあったりなかったり、バリエーションが違ったり、必ずしも7つじゃなかったりするんですけど。話は非常にたくさんあります。美術室や音楽室に飾ってある絵の人物が動く。廊下を足だけが歩く、上半身だけになった女が手で走ってくる。理科室の骨格標本や人体模型が動く。ピアノが勝手に曲を奏でる。校庭で自分の首でリフティングをする首なしの子供。特定の時間に鏡の前に立つと中に引き込まれる。とにかくいろいろです。

僕が通っていた小学校にも、そういう怪談がありました。僕の地元は元々大きな城下町で、工事のために地面を掘ると昔の屋敷の跡やらなんやらがすぐに出てくる所なんです。

そういう立地だから、小学校も元は武家屋敷があったところに建てられていました。大きな屋敷で、グラウンドまで含めて全部元は屋敷の敷地だったようです。

当然、怪談にも侍やらなんやらの要素が入ってくるわけで、腰に刀を差した血まみれの男がグラウンドを徘徊するとか、かごに入っているバレーボールがみんな打首になった生首になっているとか。体育館の天井に引っかかったままになっているボールが、夜になると生首になるとか。夜の教室に行くと切腹する自分の姿が見えて、見るとはらわたが体の中ちょん切れて死ぬとか。

階段の上から転がってくるボールを拾うと生首になっていると

いうのもありましたね、それでいつの間にか目の前に立っていた侍に首を切られて、今度は自分の首が落ちて下の階段を転がっていくことになる。

首や侍の話があるのは、やはり元が武家屋敷だったからなんでしょう。もともと、武家屋敷と言っても江戸時代の太平の世のことだから、合戦も首級も関係ない家だったんですが。そこに住まなくなったのも、幕府がなくなって士族になったんで東京に移り住んだだけなんですけどね。子供はそんなものは分からないですから、そういう怪談に武士に関係する要素が入ってくるのも当たり前と言えます。

学校がそういう土地の上に立っていたんで、新しい施設を建てたり改修工事をしたりするたび、いろいろなものがちょくちょく出てきていました。瓦とか食器とか小物とか。学校の一角にはそういうものを集めたガラスケースが置かれていて、地域の歴史や写真を掲載したホログラフと一緒に小さな展示場になっていたね。重要な物は市の博物館に寄贈されていたんで、学校に残っているのは本当に些細な物ばかりでしたが。

その中で唯一それっぽい価値がありそうだったのは、一振りの刀でした。これはどうしたわけか寄贈されずに、ケースの中に保管されていました。特に由来とかも書いていなくて、拵もボロボロだったし、元々そんなに価値のある物じゃなかったみたいですね。隣に刀を納めていた箱も展示されていましたけれど、それにも何も書いてなかったと思います。

刀っていうとやっぱり男の子は気になるものですからねえ。中にはガラスケースを開けてみて触ってみようかなんて企む子もい

ました。ばれて大目玉食らっている場面を見たことが何回かありますが。箱入りとは言っても放置されていた刀なんで、錆びて抜くこともできないんじゃないかと思えますけど。

ただ、一回だけガラスケースから出されたというか、出ている状態を見たことがあります。確か僕が4年生の時だったかな。放課後に用事があった階段を上っていると、上からバスケットボールが転がってきたんです。拾い上げようとしたんですが、さっき言った階段の話があったんで、怖くなって放っておきました。信じる信じないは別としても、やっぱりいやな感じがしますからね。誰かが怖がらせようといたはずだったのかなと思って、階段を上がつていくと、またボールが転がってきました。上の階から転がってきて、踊り場の壁で跳ね返って下の階へって具合に。上で誰かが遊んでいるのは確実ですね。

今度も無視してそのまま踊り場を曲がって登っていくと、また転がってきました。上の階から。で、上を見ただけ誰もいない。階段から離れたところから投げかけているのかと思って、残りを一気に駆け上がりました。でも、そこには誰もいませんでした。走って逃げていく足跡も聞こえない。隠れる場所もない。

代わりに、さっき言ったあの刀が転がっていました。抜き身の状態です。抜かれている状態は見たことなかったんですが、隣に鞘が転がっていたので分かりました。刀身は錆に覆われていましたが、形は保っていたように思います。今になって思い返すと、それでも抜くのは難しい——少なくとも子供なら無理そう——ぐらいでした。

さすがに怖くなって、すぐに一階に取って返して職員室に向か

いました。出しちゃいけない刀が出ていたし、大きな刃物がそのまま置かれているのは大変ですから。

触ってみようと思わなかったのかって？ あの時はどころじやなかったですかね。生首になるボールとかの話を知っていたら、とてもそんな気になれませんし。

先生方が知ると、悪質ないくらじやないかってことで結構な騒ぎになりましたが、ガラスケースの方に取り出された痕跡が無く、犯人が誰かということは全く分からずじまいでした。防犯のためなのか薄気味悪く思われたのか、刀の方も博物館に寄贈されてしまったそうです。

後になって気づいたのですが、一階に降りたときに上から転がってきたボールは見当たりませんでした。僕が降りる前に誰かが回収したのか、見逃しただけなのか。そもそもボールなんてなかったのか。

アレックス・ボーン

俺が海軍にいたときに、友達から聞いた話だ。

俺がいた工兵隊は地上で建物やら道路やらを建設する部隊だったから、船に乗ることはあんまりなかった。だから船についてのことは、その友達から聞くことが多かった。

そのころ、そいつはミサイルフリゲートに乗っていた。アメリカだと、駆逐艦よりも陸に近いところで活動する船だ。それで訓練をしてサンディエゴに帰っている途中、進路上にプレジャーボートが居座っていた。プレジャーボートって言っても、よくあるような小さい奴じゃなくて、金持ち連中が好きそうな30m以

上あるギガヨットだったらしい。

なにせよ航路妨害だから退くように命令したんだが、全然動く様子がないし応答もしない。さすがにちよっとおかしいぞってなって、艦長が人を送り込むことを決めた。

友達は臨検——船の立ち入り検査をすることだ——チームだったから、ボートの検査に行くことになった。中に誰かがいて、動けなくなったり死んだりしているのかもしれない。昔あった話だと、沖に出たときに縄梯子を垂らすのを忘れたまま全員が海に飛び込んでしまって、それで船に戻れなくなって溺れたとかいう話もあったが、それかもしれない。そうじゃなくても何か犯罪があった可能性もある。ああいうボートは金を持つてる悪い奴が使うことも多いからな。

そういうことも考えて、武装して複合艇で接近して乗り込んだんだが、中には誰もいない。幽霊船だったわけ。

ああ、幽霊船って言ってもガイコツやら幽霊やらが乗っているホラー映画のやつじゃなくて、人がいないまま海を漂っている状態の船のこと。停めてあったのが流されたり、事故で放棄しないといけなくなったりした奴が、そのまま浮いているのが幽霊船だ。

幽霊船っていうと、あのメアリー・セレスト号が有名だな。19世紀だったけな。ポルトガルの沖で漂流しているのが見つかった船。ポンプが壊れて少し水が溜まっていたけど、船は特に問題が無く水と食料も十分あった。だけど、乗組員全員がどっかに消えていたってやつ。よくわからん血の跡やらひっかき傷があったらしいけど。

友達が乗り込んだヨットは別にそういうことが無く、船舶番

号を照会したら、先週のハリケーンでヨットハーバーから波で掻っ攫われたやつだったってわかった。係留索が付いたままだったしな。

ほっとくと危険だから曳航して持って帰って、後で持ち主のところに返されたみたいだ。落とし物を見つけて持って帰って、持ち主に返しましたってだけの話だ。

ただ、友達——というか一緒に乗り込んだ臨検チームはちよつと違う物を見たらしい。食いかけの朝飯やら髭が付いたままのカミソリがあったわけじゃないし、出航前に流されたから物資も貴重品もないんだが、どうも人の気配がしたんだと。

最初から誰もいないだろうって予想はしていても、万が一ってこともあるから、臨検の際は8人で4人ずつ分かれて、常に2人1組以上の数で一部屋ずつチェックしていくんだ。人が隠れられそうな場所はしらみつぶしにな。

そうやってチェックをしていく。誰もいないんだけど、部屋に入る直前に物音が聞こえたり、ドアを開けると別のドアが動いたり。洗面所が少し濡れていたり、食器が出しっぱなしになっていたりするのも見たとか言っていたな。

まあ、ドアを開けたときに気圧が変わったせいだとか、偶然だとか、そう考えるのが普通だけど。それでも万が一って可能性もある。弾丸食らってから後悔しても意味ないから、隅から隅までチェックした。

全部調べて操舵室だけになった時、何かの影がそっちに行くのが見えたらしい。慌てて追っかけると、今度は角を曲がっていく誰かの足が見えた。それで操舵室に突入したけれど、誰もいない。

船内から出入りできるのは一か所だけ。外にはテラスがあるけれど、誰もいない。知らないやつが出てきたら、フリゲートからもある見えだしな。

気持ち悪いけれど、訓練受けた一個分隊が隅々まで探したんだから、やっぱり誰もいないだろうってことで引き上げた。後はロープをつないで曳航して、帰ってきて持ち主に引き渡して終了したはずだったんだが、友達はやっぱり気になったらしい。

角を曲がった奴。見たのは足だけだったんだが、そいつのズボンの柄が海軍勤務制服（NWU）の奴だったんだ。つまり、海軍軍人と同じズボンを履いていた。

それと、友達は臨検の時に、ブーツに折り畳みのナイフを挟み込んでいた。万が一海に落ちてロープとかが絡まった場合に、ダイバズナイフ代わりに使うためにな。曲がっていった奴が履いていたブーツにも、友達が使っている奴と同じナイフが差されていたんだとさ。

小川秋子

私が12歳の時の話。私の父方の祖父母は山に近い田舎に住んでいて、夏休みとか長い休みになると、両親と弟と一緒にそっちに旅行したの。まあ山の中って言っても実は温泉地で、リゾートとかで開発もある程度されていたから、そんなにアクセスが不便でもなかったけどね。

日本の山って結構動物が多くて、山に近い所だとクマとかイノシシとか、シカとかサルとかがしょっちゅう出てくるの。30年

ぐらい前に草食動物の個体数調整のためにオオカミを再導入したけど、それでも限界があるわね。

そんなんだから、農作物とかに被害が出て、それで補助金目当てに猟師さん出張ることもちょくちょくあって。お爺ちゃんのところでも、温泉街から少し離れたところに鉄砲店とか射撃場もあったの。お爺ちゃん自身も銃を持っていたわね。空気銃と散弾銃。ライフルまで。

日本だと散弾銃とか空気銃の免許を取って、さらに3年経たないとライフルを持ってないんだけど、昔は10年以上経たないとダメだったんだ。結構なベテランのハンターだったってことね。

それで冬の猟期になると山に入って、補助金と旅館で出す食材とをゲットしに行くことになっていたの。それで私も面白そうだからって、旅行の時にはお爺ちゃんに引っ付いて山に入っていたわ。

大抵の場合、山に入って1時間から2時間ほど歩いてると、お爺ちゃんが立ち止まって「ちょっと待ってなさい」って言う。それから銃を下ろして装填してズドン。もしくは空気銃でバストと一発。銃を向けた方に歩いていくと、鳥とかウサギが死んでいた。親戚のおじさんとか、地元の猟友会の人と一緒にいる時は、何人かで運べるもう少し大きい得物を撃ったわね。一番大きいのはツキノワグマだったな。

危ないってことで両親はあんまりいい顔をしなかったみたいだけれど、お爺ちゃんのおそばから絶対離れなかったし、遠距離から一発で仕留めるやり方だったから、獲物に近づくこともなかった

し、足場が悪いところに近づく必要さえなかったわね。電話と無線とGPSは絶対に持っていたし。

夏は猟の代わりに川魚を釣ったな。とりあえずそうやって、生き物とかご飯についていろいろ知る機会があったってわけ。

前置きはそれぐらいで、山って人里とは違う「異界」だから、そこに足を踏み入れる人たちが変な体験をするっていう話はすごく多かったわけ。21世紀にもなると昔の人ほど信心やら怪奇現象やらに拘ることはなくなってるんだけど、それでもちょっと変な体験をする人は少なからずいたみたいね。

お爺ちゃんはハンターとしてベテランだから、やっぱりそういうのを見聞きしたことも多くて、いろいろ話してくれたな。私が一緒にいる時は山の奥深くまでは入らなかったし、狩猟は昼間にしか許可されないから、そういうのが起こることはなかったけど。ただ、一回だけそういうのを体験したというか、見たことがあったの。

その時は11月に入ったばかりで、雪が降るまでは少し余裕があるぐらいの時期だった。この時期だとイノシシとかは太って美味しくなるから、他のハンターもぼちぼち山に入ってるシーズンだったの。間違えて撃たれると困るから、皆分かりやすいオレンジの服のベストとか上着とかを着ていたわ。これは世界共通のスタイルね。

大きめの哺乳類が相手になる可能性もあるから、お爺ちゃんは散弾銃とライフルを一丁ずつ持っていた。私はオレンジの服に大きめの飾りまで付けて、お爺ちゃんのベルトの後ろにつなげたロープを握ってついていったな。そうやって山に入ってから1

時間ぐらいして、鳥を何羽か仕留めた後の時だった。

私も獲物を探して色々見ていると、結構遠くの方に何か動いているのを見つけたの。シカだとおじさんと呼ばないと持つて帰るのは難しいけど、ハンバークは食べたいなと思って、お爺ちゃんに合図して止まってもらった。それで一緒に双眼鏡を出して観察したけど、どうも変な気がして。

シカっていうには色が薄い気がしたし、毛がやけに少ないというか短いというか。人間じゃないのは確かだったけど。四つ足だと思うし、服はみんなオレンジの服だし、人間だとすると素っ裸じゃないとおかしい色合いだったし。

双眼鏡で見ながら、なんじゃいあれは？ 禿げたクマかな？ クマにしちゃ細いし、足とか長くない？ とか考えてると、突然にお爺ちゃんが立ち上がってライフルを撃ったの。

これまでは一匹の獲物に一発しか撃ったところしか見たことがなかったんだけど、その時は装填していた5発を一気に撃ち尽くして。弾切れになったらクリップで装填して、それも何発か撃つて。

大人になってから私も射撃はしたことがあるけど、ボルトアクションの連射の最速記録は、今でもあの時のお爺ちゃんだわ。

さすがにびっくりして双眼鏡から目を放して、「あれ」を撃ったんだってわかったら、そいつがいた所をまた見たんだけど、何もいなくなっていたの。仕留めて下生えに隠れて見えないのかなって思ったけど、お爺ちゃんは逃がしたって言った。一撃必殺のところしか見たことなかったお爺ちゃんが、あれだけ撃って仕留め損ねたってことも驚いたけれど、そもそもあれは何なのって

話よねえ。あれだけ撃たれて生きているとか、ホラーゲームのクリーチャーじゃないんだから。

お爺ちゃんに聞いたけど、お爺ちゃん自身も何かよく知らないって。ただかなり昔の世代から、時折「あれ」が山の中に出て、近づきすぎるとろくな目に遭わないとか言われていたらしいわ。

お爺ちゃんも30年ぐらい前に一回見ただけだった。その時はいつの間にか後ろに來られていて、犬が殺されて友達が大けがしたって。鞭みたいなのんで叩かれたみたいな傷が出來て、酷く爛れたりするとかなんとか。その時も撃とうとしたみたいだけど、よく見る前に逃げられたんで、見つけたら撃ってやろうってずっと思っていたみたい。

めったに見えないからちゃんとした調査とかはできないし、単一の存在なのか、そういう種類の物なのか、全然わからないけれど。とりあえず碌なものじゃないのは分かり切っているから、この辺の猟師さんの間だと、見つけたらとりあえず撃って追い払うか、可能なら殺してしまえて相手らしいわね。仕留めたって人はいないみたいだけど。

未確認生命みたいな物かな？ お爺ちゃんとみたいに、山に入る人の間のうわさ話みたいなもので、実際に見た人なんてほとんどいないから、私の両親も知らなかったわね。

私はそれからもう一回だけ見たことがあったな。大人になってお爺ちゃんの家に行ったとき。夜が明けていないときに、家の前の道路をうろうろしている「あれ」がいたの。暗かったし生け垣が邪魔だったから、やっぱりよく見えなかったけど。

もしかして、こいつって自分を撃った相手を憶えていて、どう

にかして家を嗅ぎつけたのかなとか思ったな。その時には私も銃の免許持ってたけど、勝手にお爺ちゃんの銃借りるのもアレだし、害獣からの防衛って言っても町中で撃つのは駄目だしなとか考えてると、いつの間にか消えちゃった。

後でお爺ちゃんに話したら、人里についてくるって話は聞いたことぐらいはあったけど、自分の知っている範囲で実際に見聞きした人は初めてだって。撃った相手が年取って弱ってきたのが分かっているのかもしれないなあと笑っていたな。やっぱりあの時に、銃を持ちだしてブチ殺しておけば良かったかなとか思ったけど。

ちなみに、お爺ちゃんは今でも相変わらず元気だけど。まだしばらくは死にそうにないわね。

様々な国の、伝説、昔話、童話、寓話、噂話、怪談、奇談、都市伝説、体験談が語られ、そのたびに青い灯りが一つずつ消えていった。

100話目を秋子が語り終えた時には、残ったただ1つの明かりは、秋子の前でかすかな青い光を放ち続けていた。部屋を照らす力は全くなく、自分が置かれている机の上さえ、かろうじて見えるようにしているだけだ。真っ暗な深海の暗闇の中に浮かぶ、孤独な生物のようにも見える。

「これで100話目……」

秋子が言った。人の顔は全く見えないので、声だけで誰かの見当をつけるしかない。

「それで、灯り消しちゃう？」

メイがワクワクしているような声で聞く。話を99話で止めて、怪異が起きないようにする方法もある。100話目は既に話してしまったが、まだ灯りを消していない。何か起きるとすれば、これを消した後だろう。残った最後の光を消して周囲を真の暗闇で満たすのは、怪異が起きるかどうかに関わらずなかなか怖い。「もう100個話しちゃったしね。せっかくだからやつてみるわ」「あ、念のため懐中電灯を持っておきます。電気つける時に困るので……」

アントニオがそういった時、唐突に灯りが消えた。周囲が完全な暗闇で満たされる。わずかに見えていた机の様子さえ黒で塗りつぶされた。

「おい、いきなり消すなよ」

「私まだ消してないよ?」

「秋さん、ちよつとそういう冗談は……」

「いや、違うから」

「電気っていつ点けたらいいの?」

「皿とかひっくり返さないように気を付けてください」

「ルシフェラーゼが無くなったんじゃないのか?」

「減ったら光が弱って消えていくよ。こないきなり消える仕組みじゃないんだけど」

皆があれこれ言い始める。仕方ないので懐中電灯を……。誠がそう言いかけたとき、けたたましい警報音が響き渡り始めた。人間の神経を逆なでするように設計されたサイレン音が、真つ暗な空間で乱反射して全員感覚を混乱させた。

「え、何? どうなってんの?」

「おい、落ち着け! アレックスか誠。君らのところに懐中電灯があっただろ。それを……」

動転しそうになっているシアンの声に被せて、事態を把握しようとするジャックの指示が飛ぶ。それをさらに上書きするように、人工の音声が響いた。

『外壁に損傷確認。隔壁を閉鎖します』

「おいおいおい、マジかよ!」

アレックスらしき声がする。誠の心臓も飛び上がりそうになった。基地のどこかに穴が開いたということか。居住スペースは全部地下なので、地上が壊れたとしても穴が開いた部分だけ閉鎖すれば何とかなる。だが、それで絶対安全だという保証もない。

「メインフレーム、損傷箇所を報告しろ! おい、誰でもいいから懐中電灯か灯りをつけるんだ」

ジャックの声が大きくなる。誠は百物語を始める前に確かめておいた場所を手探りし始めた。

『損傷箇所、左ウィング上方。断熱パネルが脱落。機内気圧の低下を確認』

「は?」

「高度と速度を下げろ! 緊急エアバッグ作動システムをオンラインにするんだ!」

『損傷箇所が拡大。機体強度40%。低下中、低下中、低下中……』

誰かが悲鳴を上げ、別の誰かが喚く。誠の手が懐中電灯を探り当てた。スイッチを入れると、高照度LEDの光があふれ、思わず誠は目をつぶった。

目を開けると、部屋の中の様子がかなり見えるようになっていた。ライトをランタンモードにして全部の方向に光が行くようにする。見たところでは誰も問題なく、部屋の中におかしなことは起こっていないかった。あの警報音も悲鳴も、いつの間にか止まっている。

「みんな無事か？」

ジャックが尋ね、全員がそれに答えた。

「とりあえず、電氣をつけます」

アントニオが全体の電氣を灯すと、百物語を始める前の会議室の光景が戻ってきた。何も問題がない。軽食が無くなって、灯りの水から光が失われている点だけが違っている。問題がありそうなのは、灯りのボトルがいくつかひっくり返って、周りが水で濡れていることぐらいだ。

「あれ？ 誰かそっち行ってなかった？」

秋子が入口の方を示す。だが、部屋の中にいるメンバーは、それぞれの席のところにいる。立ち上がったぐらいで、大きく動いている者はいなかった。

「誰だよ、高度を下げるとか、緊急エアバッグとか言った奴。飛行機じゃねーんだぞ。ギャーギャー言ってたし。ビビりすぎだろ」

「男の声だったよね。ビビりで一番怪しいのはあんただけだ」

……

メイが疑わしげな眼をアレックスに向け、アレックスがむすつとした表情を返した。

ひとまずその話は置いておくことにして、ジャックが機の端末を起動し、基地を管理する管理システムを呼び出した。コマンド

を音声認識にして、施設の管理システムに接続する。

「バイタル関連設備のハザードログ表示。1時間以内」

『ありません』

「施設外壁の損傷に関するログ。1時間以内」

『ありません』

「居住および作業区域で、気圧、大気成分に異常のある個所を報告」

『ありません』

「さっき、お前がいろいろ言っていたのは何だったんだよ」

コンピューターの癖に物忘れか。アレックスがそうぼやいた時、メイが声を上げた。

「さっき聞こえてきた声ってさ、うちの会社が使ってるシステムの奴じゃないよね。警報もあんな音したっけ？」

全員の動きが止まった。あの時に聞こえてきたサイレンの音は、避難訓練などで耳にしてきた物と違っている。音声もジャックの質問に『ありません』と答えたそれとは違っていた。

「それに……、損傷個所が左ウィングとか言っていたよね。アレックスが言った通り……、飛行機？」

誠はうなじに嫌な汗がにじんでくるのを感じた。

「そうだ。カメラがあります」

アントニオが天井を指した。緩やかなカーブを描く天井の中心に、半球形の複眼式360度カメラが据えられている。半球の表面に多数の光学素子が並んでおり、それらから得た情報を統合して記録する一般的なタイプだ。昔の首振り式カメラと違って死角がない。何かが映っているはずだ。

「セキュリティ映像呼び出し。会議室。30分前から現在まで」

ジャックの言葉に従って、システムが画面にカメラの映像を表示した。カメラから見たすべての方向の映像が5分割されている。30分前の時点ではもうほとんどの青い灯りが消えて、映像は暗視用の低光量モードになっている。この時点で話しているのはアントニオだ。

ジャックが画面下のシークバーを操作して時間を進めていく。明かりがどんどん消えていき、秋子が話し終えた。その直後、突如として画面にブロックノイズが走り、音声は乱れた。声が飛び飛びになって聞こえるが、それが誰の物なのか、合成音声なのか、それとも警告音の切れ端なのか判別できない。下のシークバーとタイムコードだけが、画面の中で時間が流れている様子を示している。

短い混乱の時間が過ぎると、いきなりブロックノイズが減り、画面の中で明かりが点いた。ノイズが少しだけ残っていたが、それもすぐに消えてなくなった。あとは、誠たちが周囲を不安そうに見回して、何が起こったのかを話し合う様子が普通に再生された。

「ねえ、ちょっと戻して。なんか変なもんが映ってた気がする。電気がついた時。入り口のあたり」

秋子が指示を出した。ジャックがコマ送りで映像を戻し始める。「ストップ」

アントニオが灯りをつけた瞬間のところで動画が止まった。画像を見たジャックと秋子が眉をしかめ、すぐに全員が同じ表情を見せることになった。

「これ……。いや、こいつら……。何だ？」

ジャック、アントニオ、メイ、誠、アレックス、秋子。全員がそれぞれ画面に映っている。この基地にいる全員だ。少なくとも周囲100km以内には、この6人以外の人間はいないはずだ。

だが、画像の中にはそれ以外の人間がいた。誠の背後、アレックスの隣、秋子の斜め後ろ。入り口にも下半身が映っている。影の具合から、まだ2人ほどが廊下にいるように見える。合計で6人。

誠は思わず自分の後ろを見た。当然、誰もいなかった。

「……セキュリティチェック。施設内および周辺部に、部外者の有無を確認」

『了解。スキャン開始』

押し殺した声でジャックが命じると、無感情な合成音声に応答した。

システムが施設中のカメラやセンサーで人間を探す間、誠はもう一度画面に見入った。

アングルやブロックノイズの関係から、顔が映っている者はいない。胸から下がせいぜいだ。光量が急に变化した瞬間なので色ははっきりわからないが、白い屋外作業服——つまりは宇宙服を着ているように見える。

「少し古いタイプの服だな……。今どき、こんな分厚いのを使ってる会社はないぞ。20年ぐらい前のモデルじゃないか」

機体外壁に損傷。飛行機。20年前の宇宙服を着た6人。

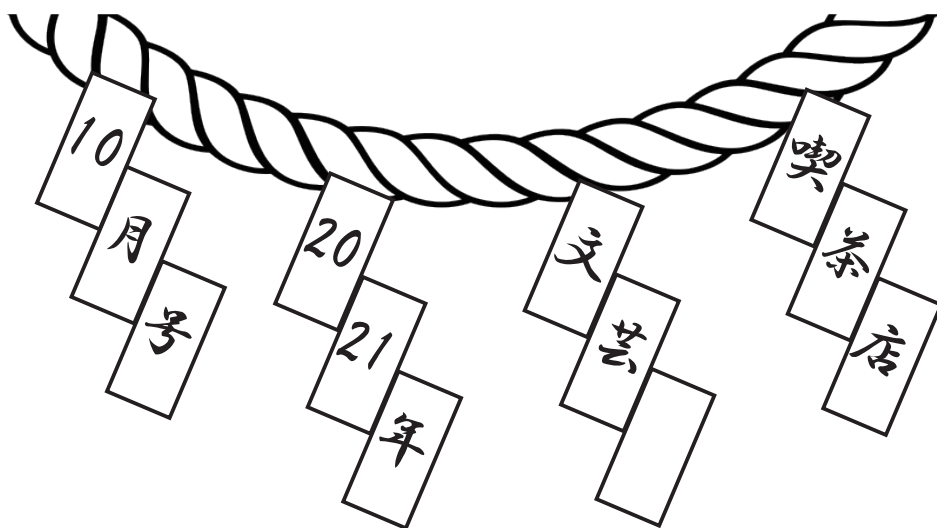
ジャックが映像をコマ送りで再生すると、6つの人影はあるフレームを境にすべて消失した。

『スキャンを完了しました。当施設には6名の従業員がいます。IDの照合が出来ない人員は存在しません』

誠は部屋の温度が急に下がったような気がした。会議室には自分たちはいないはずだが、辺りを見回すのが怖かった。これからはトイレに行くにも怯える羽目になるかもしれない。

「今回のイベントは……、やらない方が良かったかもね……」

秋子が珍しく失敗を認めた。全員が無言の肯定を返した。



発行：喫茶店文芸

監修：マサユキ・マサオ

編集：氷川省吾

HP url : <http://literarycafe.wp.xdomain.jp/>